

小学校の走り高跳び授業に関する研究 —発達段階による成果の違いの比較研究—

A Study of the Learning of High Jump in an Elementary School — The comparison of the difference of the result by the school year —

池田延行*, 田原淳子**, 岡田雅次**

Nobuyuki IKEDA*, Junko TAHARA** and Masaji OKADA**

1. 研究の目的

平成20年は新しい学習指導要領が告示され、今後約10年間の我が国の教育政策が明らかにされた。体育科においては、各学校段階で教える内容を明確にするとともに各運動の系統の精緻化を図ること、体力の長期的な低下傾向に歯止めをかけること、などが改訂された要領のポイントと思われる。

我々はこのような学習指導要領の改訂の方向を踏まえ、昨年の研究¹⁾において小学校の走り高跳び授業における到達度(身に付けるべきミニマム)を示すことを意図した。

今年度は昨年度の研究成果を基にして、同じく小学校の走り高跳びにおいて、発達段階による成果の違いを示すことを研究の目的とした。具体的には、小学校4年生(中学年)と小学校6年生(高学年)の授業を実施し、跳躍記録や運動の特性に触れる楽しさ体験、授業への満足度などの授業における変化を分析することによって、発達段階による成果の違いを明らかにしようとしたものである。

2. 研究の計画及び方法

(1) 研究の計画

本研究は、以下のような計画によって行われた。

①対象児童

- ・川崎市立O小学校4年生・6年生
- ・4年生2クラス(男子26名、女子26名)
- ・6年生2クラス(男子30名、女子22名)

②授業実施時期

- ・平成20年9月～10月

③実施授業回数

- ・4年生: 3回+授業前後のビデオ撮影
- ・6年生: 5回+授業前後のビデオ撮影

(2) 研究の方法

①記録測定

5年生及び6年生児童の走り高跳びの記録を測定した。

- ・4年生: 2回
- ・6年生: 3回

②アンケート調査

4年生及び6年生児童に授業前後に走り高跳びの特性に触れる経験についてアンケート用紙²⁾を

* 国士舘大学体育学部教授 (Faculty of Physical Education, Kokushikan University)

** 国士舘大学体育学部准教授 (Faculty of Physical Education, Kokushikan University)

配布して回答を得た。加えて、毎時間ごとに形成的授業評価に関するアンケート用紙³⁾を配布して回答を得た。

3. 結果及び考察

(1) 走り高跳び跳躍記録の変化

① 4年生の結果

図表1は、4年生における2回の跳躍記録の測定結果を男女別に示し、加えて男女別の「目標記録」⁴⁾との比較も示したものである。

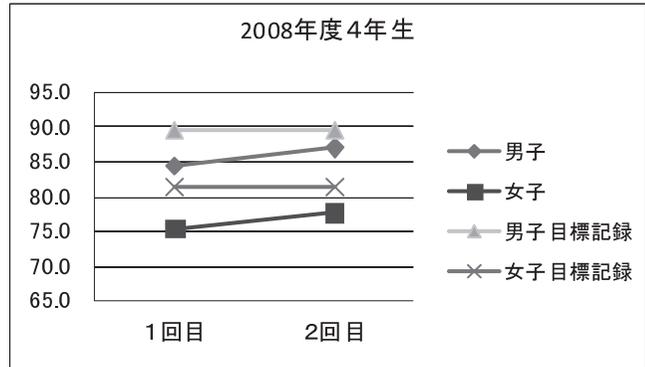
4年生は授業を通して2回の記録測定のみであったが、男女ともに2回目の跳躍記録が2.4cm高くなっており、記録の伸びが見られた。しかし、個人の身長と50m走タイムから推定した「目標記録」には男女ともに達していなかった。2回目の跳躍記録においても「目標記録」と比較して男子は2.5cm、女子では3.6cm「目標記録」低い値となっている。

② 6年生の結果

図表2は、6年生における3回の跳躍記録の測定結果を男女別に示し、加えて男女別の「目標記録」との比較も示したものである。

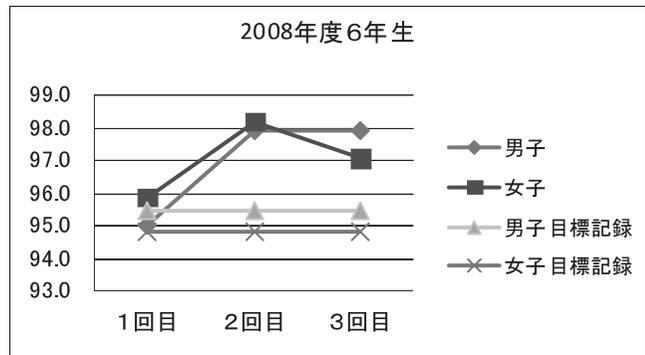
6年生は授業を通して3回の記録測定を行い、男子は2回目、3回目と同記録であったが1回目よりも向上している。女子は2回目が一番高い記録であったが、3回目も1回目を上回ることができた。男女の比較では、2回目において0.3cmではあるが女子が高い値を示している。また、「目標記録」との比較では、男子では2.5cm、女子では3.4cm上回ることができた。「目標記録」との比較からは、女子の方が高い値を示した。

2008年度4年生	1回目	2回目
男子	84.6	87.0
女子	75.5	77.9
男子目標記録	89.5	89.5
女子目標記録	81.5	81.5



図表1 4年生の記録の変化 (cm)

2008年度6年生	1回目	2回目	3回目
男子	95.0	97.9	97.9
女子	95.9	98.2	97.0
男子目標記録	95.4	95.4	95.4
女子目標記録	94.8	94.8	94.8



図表2 6年生の記録の変化 (cm)

表1 昨年度(5年生の時)の記録 (cm)

2007年度5年生	1回目	2回目
男子	92.0	91.9
女子	90.3	89.5
男子目標記録	87.0	87.0
女子目標記録	87.1	87.1

さらに、表1は今年度6年生の昨年度（5年生の時）の跳躍記録を示したものである。表1からは、5年生時と比較して男子では約6cm、女子では約8cmの跳躍記録の伸びが見られている。

③ 4年生と6年生の比較

4年生と6年生の跳躍記録の比較では、男子は6年生の方が約11cm、女子では6年生の方が約20cm高い記録を示している。男女の比較では、女子の方が4年生と6年生の差が大きく、男子の約2倍の差が見られた。

また、「目標記録」との比較では、6年生は「目標記録」よりも跳躍記録の方が高く、4年生では「目標記録」の方が高かった。この結果から、4年生では「個に応じた目標記録の設定やその記録への挑戦」が授業において十分に達成できない可能性があることが示唆された。

(2) 走り高跳びの特性に触れる

経験に関するアンケート調査結果

本研究では、走り高跳びの特性に触れる楽しさに関して10項目の内容を設定し、4年生と6年生の両学年ともに、授業前後に質問紙を配布して回答を得た。以下は、そのアンケート調査の結果である。

① 4年生の結果

図表3は、4年生全体の各項目の平均値を授業前後で比較して示したものである。4年生では、1項目（バーをうまく跳び越す楽しさ）以外は授業後での値が高くなっている。特に、「記録や順位の競い合い」、「リズムカルに跳ぶこと」、「目標に向かって練習を工夫すること」、「フォームがうまくなったこと」、「あまり跳べない人でも楽しむことができること」など

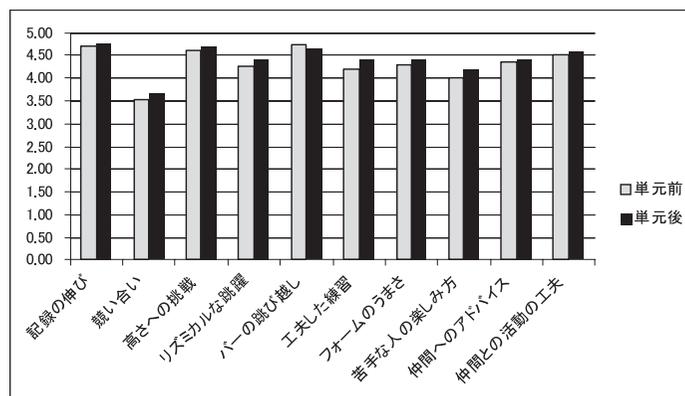
に関する項目の授業後の高い伸びが見られている。走り高跳びの特性に触れるいくつかの楽しさに4年生でも触れることが可能であると思われる。

② 6年生の結果

図表4は、同じく6年生の授業前後の比較を示したものである。

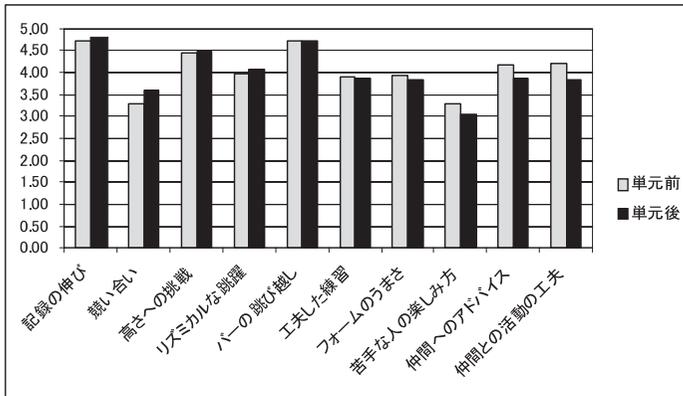
6年生については、授業後に高い値が示された項目と逆に低い値が示された項目とに分けられた。授業後に高い値が示された項目は、「記録の伸び」、「記録や順位の競い合い」、「リズムカルに跳ぶこと」、などであった。記録への挑戦やリズムカルな跳躍についての楽しさは授業によって確保されていたと思われる。一方、低い値が示された項目は「フォームがうまくなったこと」、「あまり跳べない人でも楽しむことができる」、「仲間へのアドバイスの大切さ」、「仲間との活動の工夫の大切さ」などであった。これらの授業後の低い値

	単元前	単元後
記録の伸び	4.71	4.76
記録や順位の競い合い	3.53	3.65
限界の高さへの挑戦	4.61	4.71
リズムカルに跳ぶこと	4.25	4.43
バーをうまく跳び越すこと	4.75	4.65
目標に向かって工夫して練習すること	4.20	4.43
フォームがうまくなったこと	4.29	4.43
あまり跳べない人でも楽しむことができる	4.00	4.22
仲間へのアドバイスの大切さ	4.35	4.41
仲間との活動の工夫の大切さ	4.53	4.57



図表3 特性に触れる経験の授業前後の比較（4年生）

	単元前	単元後
記録の伸び	4.71	4.78
記録や順位の競い合い	3.31	3.59
限界の高さへの挑戦	4.45	4.49
リズムカルに跳ぶこと	3.98	4.06
バーをうまく跳び越すこと	4.71	4.71
目標に向かって工夫して練習すること	3.90	3.88
フォームがうまくなったこと	3.94	3.82
あまり跳べない人でも楽しむことができる	3.29	3.06
仲間へのアドバイスの大切さ	4.18	3.88
仲間との活動の工夫の大切さ	4.20	3.84



図表4 特性に触れる経験の授業前後の比較 (6年生)

は、特に走り高跳びが苦手な児童への個別的な指導や仲間同士の教え合い・活動の工夫などの指導が不足していたことが要因と思われる。

③ 4年生と6年生の比較

4年生と6年生の結果の比較では、6年生の授業後の値の低さが指摘できる。この原因としては、上記のような授業での指導の不足があげられようが、今回授業を行った6年生は昨年5年生も走り高跳びを経験していることから、2年連続での走り高跳び授業という視点からの授業づくりの課題が示されたこととなる。例えば、児童同士の話し合いや活動の工夫、さらには授業内容への積極的なかわり、などが今後さらに検討していく必要があると思われる。

(3) 形成的授業評価の結果

今回の授業では、昨年に引き続いて授業時間ごとに「形成的授業評価アンケート用紙」を配布し

て児童に回答を求めた。アンケート項目も昨年と同様に9項目である。

① 4年生の結果

図表5は4年生の「形成的授業評価」の変化の様子を示したものであり、その結果はクラスごとにまとめている。

4年1組では、3回の調査全てにおいて総合評価が5（5段階評価）であり、4年1組の児童が授業内容を高く評価していることが示されている。特に、「成果」の項目への評価が高い。また、「意欲・関心」での「楽しさ体験」への評価も高くなっている。一方、4年2組では、総合評価が2回とも4であり、1組に比べると授業への評価はやや低い結果となった。また、評価項目では「意欲・関心」の項目の得点が高かった。

② 6年生の結果

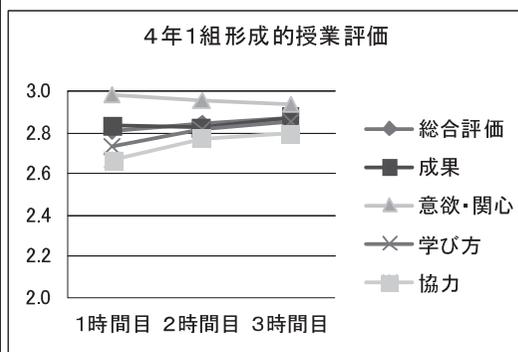
図表6は6年生の「形成的授業評価」の授業時間ごとの変化の様子を示したものであり、その結果は4年生と同様にクラスごとにまとめている。

6年1組では、総合評価が3もしくは2であり、形成的授業評価の値は低いものであった。特に、「協力」の項目の値が低い。さらに、授業時間ごとの変化では、1回目の評価が最も高く、2回目と3回目はやや低くなっていることから、授業づくりでの課題が残された。一方、6年2組では、総合評価は4もしくは3であり、1組よりも高かった。また、項目では「意欲・関心」と「学び方」が高い値を示した。授業時間ごとの変化では、2組は大きな変化が見られなかったが、2回目の値が最も高くなっている。

このように、6年生ではクラスによって「形成的授業評価」の値が異なっており、授業づくりでの指導の仕方などが課題となった。

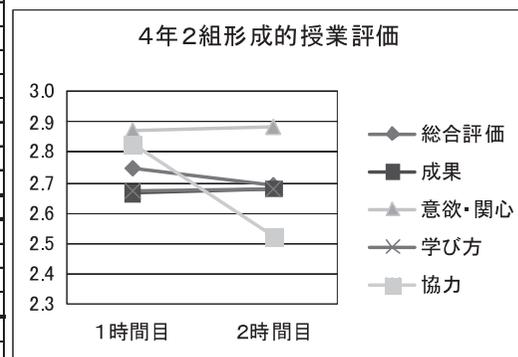
形成的授業評価 一覧表 4年1組

次元(項目)		1時間目	2時間目	3時間目
成果	平均	2.83	2.82	2.88
	評価	5	5	5
意欲・関心	平均	2.98	2.96	2.94
	評価	4	4	4
学び方	平均	2.73	2.81	2.85
	評価	4	5	5
協力	平均	2.67	2.77	2.79
	評価	4	4	4
成果	1. 感動の体験	平均 2.79 評価 5	平均 2.75 評価 5	平均 2.75 評価 5
	2. 技能の伸び	平均 2.88 評価 5	平均 2.88 評価 5	平均 2.96 評価 5
	3. 新しい発見	平均 2.83 評価 4	平均 2.83 評価 4	平均 2.92 評価 5
意・関	4. 精一杯の運動	平均 2.96 評価 4	平均 2.92 評価 4	平均 2.88 評価 4
	5. 楽しさ体験	平均 3.00 評価 5	平均 3.00 評価 5	平均 3.00 評価 5
学び方	6. 自主的学習	平均 2.71 評価 4	平均 2.79 評価 5	平均 2.92 評価 5
	7. めあてをもった学習	平均 2.75 評価 4	平均 2.83 評価 4	平均 2.79 評価 4
協力	8. 仲良く学習	平均 2.79 評価 4	平均 2.83 評価 4	平均 2.83 評価 4
	9. 協力的学習	平均 2.54 評価 3	平均 2.71 評価 4	平均 2.75 評価 4
	総合評価	平均 2.81 評価 5	平均 2.84 評価 5	平均 2.87 評価 5



形成的授業評価 一覧表 4年2組

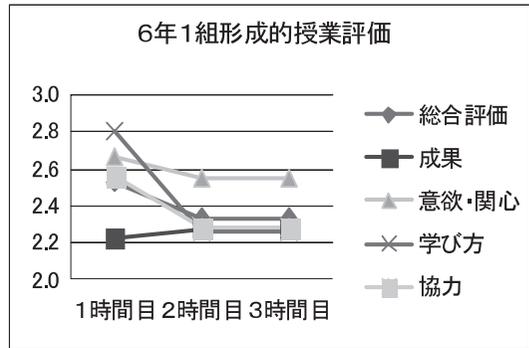
次元(項目)		1時間目	2時間目
成果	平均	2.67	2.68
	評価	4	4
意欲・関心	平均	2.87	2.89
	評価	4	4
学び方	平均	2.67	2.68
	評価	4	4
協力	平均	2.83	2.52
	評価	4	3
成果	1. 感動の体験	平均 2.43 評価 4	平均 2.41 評価 4
	2. 技能の伸び	平均 2.78 評価 4	平均 2.77 評価 4
	3. 新しい発見	平均 2.78 評価 4	平均 2.86 評価 5
意・関	4. 精一杯の運動	平均 2.87 評価 4	平均 2.86 評価 4
	5. 楽しさ体験	平均 2.87 評価 4	平均 2.91 評価 4
学び方	6. 自主的学習	平均 2.65 評価 4	平均 2.64 評価 4
	7. めあてをもった学習	平均 2.70 評価 4	平均 2.73 評価 4
協力	8. 仲良く学習	平均 2.87 評価 4	平均 2.50 評価 3
	9. 協力的学習	平均 2.78 評価 4	平均 2.55 評価 3
	総合評価	平均 2.75 評価 4	平均 2.69 評価 4



図表5 形成的授業評価の変化(4年生)

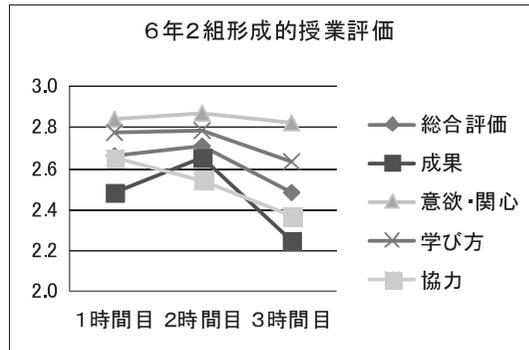
形成的授業評価 一覧表 6年1組

次元(項目)		1時間目	2時間目	3時間目
成果	平均	2.23	2.28	2.01
	評価	3	3	2
意欲・関心	平均	2.66	2.54	2.59
	評価	3	2	2
学び方	平均	2.80	2.26	2.52
	評価	4	2	3
協力	平均	2.56	2.28	2.20
	評価	3	2	2
成果	1. 感動の体験	平均 1.92	2.17	1.96
	評価	3	3	3
成果	2. 技能の伸び	平均 2.52	2.35	1.96
	評価	3	3	2
成果	3. 新しい発見	平均 2.24	2.30	2.13
	評価	2	3	2
意欲・関心	4. 精一杯の運動	平均 2.56	2.52	2.57
	評価	2	2	3
意欲・関心	5. 楽しさ体験	平均 2.76	2.57	2.61
	評価	3	2	3
学び方	6. 自主的学習	平均 2.68	2.26	2.52
	評価	4	3	3
学び方	7. めあてをもった学習	平均 2.92	2.26	2.52
	評価	4	2	3
協力	8. 仲良く学習	平均 2.92	2.61	2.52
	評価	5	3	3
協力	9. 協力的学習	平均 2.20	1.96	1.87
	評価	2	1	1
総合評価		平均 2.52	2.33	2.29
総合評価		評価 3	2	2



形成的授業評価 一覧表 6年2組

次元(項目)		1時間目	2時間目	3時間目
成果	平均	2.48	2.65	2.25
	評価	4	4	3
意欲・関心	平均	2.84	2.87	2.83
	評価	4	4	4
学び方	平均	2.77	2.78	2.63
	評価	4	4	4
協力	平均	2.65	2.54	2.37
	評価	4	3	3
成果	1. 感動の体験	平均 2.55	2.52	2.30
	評価	4	4	4
成果	2. 技能の伸び	平均 2.36	2.70	2.04
	評価	3	4	2
成果	3. 新しい発見	平均 2.55	2.74	2.39
	評価	3	4	3
意欲・関心	4. 精一杯の運動	平均 2.77	2.87	2.78
	評価	3	4	3
意欲・関心	5. 楽しさ体験	平均 2.91	2.87	2.87
	評価	4	4	4
学び方	6. 自主的学習	平均 2.68	2.78	2.65
	評価	4	5	4
学び方	7. めあてをもった学習	平均 2.86	2.78	2.61
	評価	4	4	3
協力	8. 仲良く学習	平均 2.86	2.74	2.57
	評価	4	4	3
協力	9. 協力的学習	平均 2.43	2.35	2.17
	評価	3	3	2
総合評価		平均 2.66	2.71	2.49
総合評価		評価 4	4	3



図表6 形成的授業評価の変化(6年生)

③ 4年生と6年生の比較

「形成的授業評価」での両学年の比較では、4年生の方が6年生と比べて高い値を示した。特に、4年1組の高い評価が目立っている。この結果は、走り高跳びの学年による授業実施の回数が影響しているものと思われる。4年生の「形成的授業評価」の高い値は走り高跳び授業が初めての体験であり、新しい運動種目への児童の興味・関心が高かったことが予想できる。一方、6年生は昨年の5年生時とはほぼ同じ運動種目の授業であり、4年生ほどの新鮮さを感じなかったものと思われる。

現行学習指導要領と新学習指導要領は、いずれも走り高跳びをはじめとする陸上運動の種目は5年生・6年生のいずれかの学年のみでの指導が可能としており、今後は児童の興味・関心を事前に十分把握してからの授業実施が望まれる。

4. 結果のまとめ

今回の走り高跳び授業の結果は、以下のようにとまとめることができる。

- ① 跳躍記録の変化の分析からは、6年生の記録の高さや昨年に比べての伸びが目立っていた。4年生も1回目よりも2回目の跳躍記録が伸びているが、男女とも「目標記録」に達していたかった。また、4年生と6年生との比較では、女子の差が約20cmであり男子よりも大きくなっていった。
- ② 走り高跳びの特性に触れる楽しさについての調査結果からは、跳躍記録の変化の分析とは逆に、4年生の授業後での高い値が目立っていた。走り高跳びの記録の伸びや個人の目標記録への到達は不十分であっても、走り高跳びの特性に触れる様々な活動を授業を通して行っていたものと思われる。一方、昨年に続いている走り高跳び授業を行った6年生は、記録への挑戦などの楽しさを感じているものの、特に仲間との積極的なかわりに関する

項目で授業後に低い値が示された。これらの結果は、2年連続しての走り高跳び授業での授業内容の検討に新たな課題が示されたことになる。

- ③ 形成的授業評価でも、跳躍記録とは反対に4年生で高い値が示された。記録の伸びや目標記録への到達は十分ではなかったが、初めて体験する走り高跳びへの興味・関心の高さが高い授業評価へと結びついたものと思われる。一方、6年生の形成的授業評価は4年生に比べて低いものであった。昨年の走り高跳び授業体験が今年の授業への意欲等へ十分に繋がらなかったことになり、授業づくりへの課題が残された。

これらの結果から、4年生と6年生の走り高跳び授業では、跳躍記録と授業評価の両面では反対の成果が得られたこととなった。

跳躍記録の伸びと高い授業評価は、両方ともよい授業づくりには欠かせない条件であることから、今後は両方の観点ともに高まるような授業内容の検討、6年間を見通してのカリキュラムづくり、などが不可欠と思われる。

引用・参考文献

- 1) 池田・田原・岡田、「小学校の走り高跳びにおける到達度に関する研究」、国士舘大学体育研究所報第26巻、2007年
- 2) かつて、池田が作成した「走り高跳びの特性に触れる楽しさ項目（8項目）：小学校における走り高跳び学習の適時性に関する研究、スポーツ教育学研究第12巻第2号、1992年」を元にして、10項目に再構成したもの。
- 3) 高橋健夫編著「体育授業を観察評価する」、明和出版、2003年、を参考にして作成した。昨年も同様のアンケート用紙を配布して回答を得ている。
- 4) 池田らが作成した「個に応じた目標記録（走り高跳びのノモグラム）：個人の身長と50m走タイムから目標記録を推定するもの」の平均値を「目標記録」としている。